

書評

許仁碩／讀《「台日友好」異論》：我們不是朋友嗎？

許仁碩：《「台日友好」異論》を読む われわれは友人ではないのか？

文：許仁碩

責任編輯：張詩芸

2026/2/12

「報導者」掲載ページ <https://www.twreporter.org/a/bookreview-rethinking-taiwan-japan-friendship>



日本の第51回衆議院は、首相・高市早苗が国会解散を宣言したことを受けて総選挙が実施され、2026年1月27日には多くの市民が東京駅前に集まり、候補者の街頭演説に耳を傾けた。今回の選挙は、高市早苗首相就任後初の「信任投票」と見なされ、選挙期間中には日中台米関係および関連政策をめぐって日本社会で激しい論争が巻き起こった。台湾社会でも大きな関心が寄せられている。（撮影／Yoshinobu Goto／The Yomiuri Shimbun via AFP）

近年、台湾海峡情勢の影響により、日本社会では台湾問題がますます頻繁に議論されるようになっていく。例えば高市早苗首相は、2025年11月の国会答弁において、中国が軍艦で台湾周辺海域を封鎖し、米軍が介入を決定した場合、日本にとって存立危機事態に該当する可能性があり、その場合には自衛隊が米軍を支援し得るとの認識を示した。高市の発言は台湾では「台日友好」の象徴と受け止められ、中国政府の反発を招いた。一方、日本国内では日中台米関係および関連政策や条約をめぐり激しい論争が巻き起こった。

作家の安田峰俊は、この論戦に参加する各方面の動向を観察したうえで、X（旧 Twitter）に「日本では台湾を支持する評論家やネットユーザーの多くは右派寄りだが、日本の台湾研究者の多くは進歩派であり、これは非常に興味深い」と投稿した。「台日友好」の背後には、さらに掘り下げ、再考すべき多くの論点が存在していることを示唆している。

台湾で20年にわたり教鞭をとり、中国語での執筆を貫いてきた日本人研究者・笹沼俊暁による著書『[「台日友好」異論：該如何克服互相理解的認知齟齬和立場矛盾？](#)』（「台日友好」異論——いかにして相互理解における認識の齟齬と立場の矛盾を克服するか？／游撃文化、2025年11月）は、まさにそのような「空気を読まない」役割を果たしている。著者は台日間の友好関係の構築に反対しているわけではない。むしろ、現在の双方が良好な関係を強調する雰囲気の中で、率直に手を挙げて問いかけているのである。「なぜ私たちは互いを友人だと思っているのか。本当に互いを理解しているのだろうか」と。

『「台日友好」異論』、笹沼俊暁 著、游撃文化



台日関係における矛盾としてしばしば指摘されるのは、日本政界では与党・自由民主党（自民党）を中心とする保守派が、国防に関しては、中国の台湾侵攻を阻止しようとする現在の台湾社会の立場と比較的近く、台湾との往来も多い政治家を抱えているという点である。その一方で、内政課題に目を向けると、ここ数年の台湾社会は同性婚の法制化、原発ゼロの推進、多元的な民族・アイデンティティの尊重といった改革を進めており、その方向性はむしろ日本の左派・進歩派陣営の主張に近い。

台湾の立場から見れば、「保守派とは国防を語り、進歩派とはジェンダーや環境を語る。左右双方うまく付き合えばよいのではないか」と考える人もいるかもしれない。あるいは、より現実的に、「外交において相手が台湾支持を表明してくれるなら、その国の国内政治における主張がどのようなものであれ、台湾人の感知するところではない」と受け止める向きもあるだろう。

では、別のシーンから想像してみよう。2023年、台湾の労働党が台湾で東アジア平和シンポジウムを開催し、沖縄の反基地運動の活動家を招き、現状を報告してもらった。当日は《中天》が全編を生中継し、沖縄からのゲストの後には、統一促進党の[張安樂](#)〔別名「白狼」。台湾最大の暴力団「竹聯幫」の元総長で、2005年に統一促進党を結成して政治活動が続ける〕、さらに後に[共謀事件への関与で起訴された退役将軍・高安国](#)〔中華民国軍の退役中将。2020～24の間に中国に何度か渡航して中国の情報機関と接触し資金援助を受け、武装組織を立ち上げようとしたとして2025年10月に国家安全法違反で7年6月月の禁錮を受けた〕が発言した。このような顔ぶれを見て、台湾の人々はこの「平和シンポジウム」をどのように理解するだろうか。そして、沖縄の反基地運動をどのように受け止めるだろうか。

「台日友好」にひそむ矛盾と願望

2025年12月、首相官邸前には、高市早苗首相によるそれ以前の「台湾有事」に関する発言に抗議するため、多くの市民が集まった。この出来事は、「台日友好」をめぐる日本社会内部のさまざまな見解や矛盾を浮き彫りにしている。（撮影／Zhu Chenxi／China News Service／VCG via Getty Images）



もし私たちが、相手が口先で自分たちを支持しているかどうかだけを気にし、その相手がどのような背景を持つのかを理解しようとせず、あるいは相手の主張や行動がその社会の人びとにどのような影響

を及ぼすのかを顧みないとすれば、それは真の友情と言えるのだろうか。外交官であれば、確かに外国政府と向き合うほかない。しかし、市民社会はどうだろうか。

著者は本書の中で、このような矛盾は台日双方の「願望」に由来すると鋭く分析する。日本の保守派にとって、戦後台湾の国民党政権は反共の戦友であった。台湾の民主化後には、「台湾人が親日なのは日本統治に感謝しているからだ」というイメージが、戦前の日本の植民地支配を肯定する根拠として受け取られてきた。さらに近年、中国の拡張に直面する中で、台湾は再び「抗中（中国への抵抗）」の戦友と位置づけられている。

他方、日本の進歩派にとっては、長らく台湾への理解が十分でなかっただけでなく、中国による台湾侵攻という「台湾有事」が現実味を帯びる中でも、日本国憲法第九条の非戦条項を守り、戦後平和主義を維持しようとする立場から、「日本を戦争に巻き込んではいならない」という原則に固執するあまり、台湾が直面する危機を否認し、中国の侵略に対する台湾人の現実の恐怖を見過ごしてしまう傾向がある。

著者は核心を突くように指摘する。これら二つの立場は日本国内では対立しているように見えるが、いずれも自らの立場から出発し、台湾人の主張や行動を恣意的に切り取り、台湾人の主体性や安全保障上のニーズを十分に尊重していないという共通の問題を抱えているのだ。

問題は日本側だけにあるのではない。台湾に長く暮らす研究者として、著者は台湾側の課題についても深く省察している。多くの台湾人が心から日本に憧れ、日本を学ぶべき「大国」だと考えている一方で、日本の「親日」イメージへの欲求を意図的に満たすことで、経済的・政治的利益を得ようとする人びとも少なくない。いずれにせよ、こうした姿勢は、日本人の優越感を前提とした「台日友好」という印象を強化するにすぎず、台日間の相互理解を深めることにはつながらない。それどころか、植民地統治以来続いてきた不平等な関係をいっそう固定化させることにもなりかねない。

自省から始まる^{そうゆう}諍友

著者は「台日友好」の背後にある問題を分析した後、単に双方を等しく批判する姿勢にとどまるのではなく、まず自己省察から出発する。台湾に定住する日本人として、自身が「台日友好」の恩恵を受けてきたことを率直に認めつつも、そこに不安を覚え、問題を提起する責任があると考えている。台湾における日本への憧れや迎合に懸念を抱きながらも、中国の侵略に直面する台湾の苦境については十分に理解しているという。ゆえに日本の進歩派の一員として、台湾を非難する資格は自分にはないとしつつ、もし進歩派が保守派の軍事路線に反対するのであれば、まず自らを省みて、民主と平和の理念にかなうと同時に、台湾を侵略から守り、東アジアの平和を維持しうる実行可能な提案を、責任をもって提示すべきだと主張する。

また、台日の真の友情を深めるためには、双方の相互理解を高める必要がある。しかし台湾で日本を語る際には、これまで述べてきた「親日」への期待に応えるため、「良い知らせだけを伝え、問題には触れない」傾向がしばしば見られる。本書のもう一つの重要な特徴は、より批判的な視点から、日本社会に存在するさまざまな問題を紹介している点にある。日本の右派の発展史と主要な政治的主張、日本文学や日本社会における多様性への無関心などが取り上げられている。とりわけ 2011 年の「3・11」東日本大震災に伴う福島原発事故について、著者は、日本社会が官僚・学者・電力会社の責任を徹底的に追及できなかったばかりか、地震大国であるというリスクや原発そのものの構造的欠陥を顧みず、原発再稼働を推し進めていると批判する。日本における原発推進と反原発運動の歴史を振り返りながら、

台湾が進めてきた「原発ゼロ」政策の実践経験が、日本社会における市民参加への情熱を再び呼び起こす契機となることへの期待も示している。

社会問題にとどまらず、著者は自身の専門である人文思想研究の観点からも多くの論者や作品を紹介する。たとえば、政治学者・丸山眞男による日本の全体主義批判、丸谷オ一の『裏声で歌え君が代』における台湾独立運動の視点からの国家論、柳美里『JR 上野駅公園口』が描く日本社会の周縁の人生、崔元植『ここがロードスだ：東アジア国際主義の理想と現実』における覇権主義に抗する小国思想、さらに中島岳志『アジア主義 その先の近代へ』における日本のアジア主義と帝国主義の関係の考察などである。「親日／親台」という平板なイメージとは対照的に、本書は多様な視点と方法を提示し、台日関係の中でしばしば見過ごされてきた複雑さについて、読者自身が思索し、咀嚼するための材料を豊かに提供している。

より全面的で多元的な必要がある日台間の相互理解



2026年2月5日、日本の首相・高市早苗は東京で台湾積体回路製造（TSMC）の会長・魏哲家と会談した。魏哲家は特別に高市首相の著書を持参した。日台は熊本第2工場において3ナノメートルの先端半導体を生産する方針を確認し、この動きは自民党の経済政策における重要な前進と見なされている。同時に経済的相互利益を基盤とする「台日友好」関係をさらに強化するものと評価されている。（撮影／Kazuhiro Nogi／Pool Photo via AP／達志影像）

本書は主にコラムを集成した論集であり、それぞれの論考から台湾の読者に日本をより深く知ってほしいという著者の誠実な思いが伝わってくる。しかし、多くの理論や現象が紹介されているとはいえ、一冊の書物として見たとき、著者が肯定的に捉える日本の「戦後民主主義」とは何か、あるいは現在の日本社会においてそれを支持する人びとがどのような主張や行動をとっているのかについては、なお十分に明確な像が示されているとはいえない。

今日の日本社会では、著者のいう「戦後民主主義」を掲げる「左／リベラル」勢力、すなわち従来の「革新」勢力と、「右／保守」勢力との区分は、60代以上の世代では比較的是っきりしているかもしれない。しかし50歳以下の多くの日本人は、自らを特定の政党の固定的支持者とは考えておらず、選挙ごとに世代間で投票傾向も大きく分かれている。近年、新興政党が台頭している背景にも、こうした状況がある。

このような局面においては、「戦後民主主義」が具体的にどのような主張や実践を指し、日本社会のどの層に支持されているのかを、全体像として把握するのは容易ではない。もし台日双方に共通する政治・社会的課題——たとえば著者が本書で触れている学歴問題のような日常生活に関わるテーマ——を背景に、より具体的な資料やデータが補われていれば、「戦後民主主義」とは何か、そして台日間でいかなる具体的な交流の可能性があるのかを、読者はより理解しやすくなっただろう。

同様のことは、著者による日本の与党・自民党批判にも見られる。著者の指摘どおり、台湾の読者は日常的に日本の自民党に迎合的な言説に触れることが多く、日本への憧れを抱きやすい。そのため、地震対応、防疫、原発事故などの問題をめぐって、日本政府高官の発言や対応を著者が直接批判する場面

では、日本の左派・リベラル言論の文脈に身を置いていない台湾の読者にとって、本文中の情報だけを手がかりに、「アジアで最も貧しい国」「悪循環の破滅的スパイラル」「（自民党政権の継続は）理解不能」「日本沈没」といった強い批判表現の背後にある議論を十分に読み取ることは、必ずしも容易ではないだろう。

さらに、台日間の経済的往来もまた、「台日友好」を支える重要な基盤である。近年よく知られている事例としては、台日間の農産物の輸出入や、TSMC の日本進出が挙げられる。2026 年 2 月の衆議院総選挙の期間中には、TSMC の董事長・魏哲家が高市早苗首相と会談し、日本で 3 ナノメートルの先端半導体を生産する方針を発表した。これは自民党の経済政策にとって追い風になる出来事と受け止められた。また、2025 年 7 月および 2026 年 2 月の二度の日本の選挙における世論調査では、国民が最も関心を寄せている課題は「いかに経済を立て直すか」であることが示されている。民主主義が民意を基盤とする以上、「戦後民主主義」を軸に「異論」を展開する本書が、「台日友好」の経済的側面をどのように位置づけるのかは、きわめて興味深い問いである。

台湾は中国の脅威に直面している以上、友人は多いに越したことはない。しかし「敵の敵は友」という二分法的な論理だけに依拠すれば、かえって主体性を失い、誰と友人関係を築くかを敵によって決められてしまいかねない。本書が明らかにしているのは、日本社会の多様性と複雑さだけではない。それは同時に、異なるかたちの「台日友好」の未来を切り開く可能性でもある。

友好を語る際に利害計算が伴うのは当然のことかもしれない。しかしだからこそ、対等かつ誠実に相手を理解し、耳を傾け、必要とあらば耳に痛い忠言をも辞さない「諍友（そうゆう）」の存在は、いっそう貴重である。本書は、「台日友好」に関心を寄せる読者にとって、豊富な情報と議論を提供し、熟考を促す一冊である。そして、紙幅の制約ゆえに触れきれなかった論点を、読者自身が行動によって補っていくことも期待されている。今後、著者のような諍友がさらに増え、台日間の相互理解がより全面的かつ多元的なものとなり、「台日友好」がより強靱で健全な関係へと発展していくことが望まれる。

（「報道者」編集部：この論稿は游撃文化から提供いただきました。）

深く真実を追求し、多様な声と共に歩む

独立した精神は、自由な思考の条件です。独立したメディアこそが公共の領域を守り、自由な議論と真実を浮かび上がらせることができます。厳しいメディア環境の中で、『報道者（The Reporter）』は非営利組織という形態を堅持し、公共領域での調査報道や深層取材に取り組んでいます。私たちは読者の支援によって運営を行い、商業広告に依存せず、独立自主の前提のもと、さまざまな重要な公共課題に取り組んでいます。今年は『報道者』創刊 10 周年の年です。今後も国内外のニュースの真実を追い続け、次の 10 年の挑戦を乗り越えるために、ぜひ私たちを支援してください。

[寄付する](#)



【基本資料】

書名：「台日友好」異論——該如何克服互相理解的認知齟齬和立場矛盾？

作者：笹沼俊暁

編號：Ponder 13

出版者：游擊文化

装幀設計：井十二設計研究室

出版日期：2025年11月5日

ISBN：978-626-99796-6-0

頁數：352頁

定價：450元

規格：14.8 x 21 cm／平裝／單色

出版社のサイトより

<https://guepubtw.com/2025/10/30/%e3%80%8c%e5%8f%b0%e6%97%a5%e5%8f%8b%e5%a5%bd%e3%80%8d%e7%95%b0%e8%ab%96/>

【著者紹介】

笹沼俊暁（ささぬま・としあき）

東海大学日本語言文化学系教授。1974年、日本・静岡県生まれ。現在は台中在住。著書に『「国文学」の思想 その繁栄と終焉』、『リービ英雄——「鄙」の言葉としての日本語』、『「国文学」の戦後空間 大東亜共栄圏から冷戦へ』、『流轉的亞洲細語 當代日本列島作家如何書寫台灣，中國大陸（流轉するアジアの細語 現代日本列島の作家はいかに台湾・中国大陆を書くか）』などがある。

【目次】

推薦の序 「無縁者」の独立評論／張正

序 台日友好の矛盾の中に隠された在台日本人

第一章 台湾は日本の危機にどう向き合うべきか？

- 日本の「戦後民主主義」と台湾
- 日本の戦後民主主義は、現代台湾の民主にいかなる意味を持つのか？
- 安倍亡き後に残された、日本というパンドラの箱——日本現代政治から考える台日関係（上）
- 『パンとサーカス』という政治エンターテインメント小説が映し出す日本社会の歪み——日本現代政治から考える台日関係（下）
- 近代日本の「敗者」と上野公園——柳美里『JR 上野駅公園口』を読む——隠蔽された暴力としての「台日友好」に抗して

第二章 日本国憲法と台湾

- ウクライナ戦争のもとで、台湾から日本国憲法を再考する
- 日本の護憲派の困惑と混乱——ウクライナ戦争のもとで、台湾から日本国憲法を再考する（二）

- ・ 『ここはロードス——東アジア国際主義の理想と現実』を論じる——「小国主義」の視点から台日関係を再考する
- ・ 苦難の歴史を共有した以上、台湾人と沖縄人は必ず理解し合えるのか——在日台湾人作家の苦悩と、彼が描く沖縄

第三章 パンデミック下で台日現代史を再考する

- ・ 日本の感染症対策の失敗と大日本帝国の亡霊
- ・ 日本の戦後社会発展から見る台湾の新型コロナ「総力戦」
- ・ 感染者が多すぎるなら検査をやめればいいのか——目を閉ざしてパンデミックに向き合わない日本人
- ・ 日本における「右翼」とは何か？

第四章 日常生活における台日の矛盾

- ・ なぜ私は中国語で書くのか？——台湾に暮らす日本語母語話者の戸惑いと悩み
- ・ なぜ私は日本語を話せないのか？——白人の顔を持つ日本語作家が、日本で抱える戸惑いと悩み
- ・ 日本人は皆時間厳守で礼儀正しく、台湾人は皆情熱的でおおらか？——台湾から見た「日本のステレオタイプ」と自己像
- ・ トップ大学エリートの空洞——日本の学歴主義から考える台日社会
- ・ 勉強は無意味とポピュリズム——反知性主義から考える台日社会

第五章 潜在的な大災厄に直面する台日の人びと

- ・ 日本の悪夢——「南海トラフ巨大地震」と富士山噴火、カウントダウンはすでに始まっている
- ・ 地震大国に原発を建てるということ——なぜ日本は原発を再稼働すべきではないのか
- ・ 地震と原発事故を前にした日本社会の憂慮
- ・ 戦後日本産業社会のボトルネックと原発（一）——日本はいかにして原子力を導入し推進したのか
- ・ 戦後日本産業社会のボトルネックと原発（二）——日本における反原発運動の意義とは何か

結語 これから台湾と日本はどの方向へ進むべきか

あとがき